令和７年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立 大宮北 高等学校 ）

学校番号　ｓ４９

目指す学校像	校歌の一節にもある「花咲く未来」を実現するために、「自主・自律・創造」の校訓のもと、生徒の「生きる力」を育むことで、自らの「志」に向かって努力し、生涯にわたって社会に貢献できる人材を育成します。
重点目標	１ ＳＳＨ指定校としての取組を起点に、生徒一人ひとりに高い「志」を育んで、第一志望の進路実現を支援する。 ２ 探究的な授業を通して、自ら課題を発見し解決する主体的な学習態度を育て、社会のリーダーとなる確かな学力を身に付けさせる。 ３ 北高生としての品格を高め、健全な心身と豊かな人間性を育む。 ４ 地域の理数教育拠点校として活動すると同時に、ユネスコスクール認定校としての取組を展開して、国際社会へ開かれた学校に発展させる。

達成度		
	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	概ね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

学校自己評価								学校関係者評価
年度目標					年度評価			実施日令和　年　月　日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	＜現状＞ ○令和 6 年度は、319 名の卒業生のうち 291 名が大学、1 名が短大、1 名は防衛大学校、7 名が専門学校へ進学し、19 名が進学準備に入った。また、国公立大学に 54 名（既卒者を含めると 57 名）が合格し、早慶上理に 19 名、GMARCH に 94 名が合格した。GMARCH の合格者は昨年よりは減少しているが、早慶上理の合格者は昨年と比べて約 3 倍の人数が合格した。さらに既卒者から、旭川医大の合格者もでた。 ＜課題＞ ○生徒が明確な高い「志」を抱き、主体性を持って挑戦し学ぶ姿勢を育むと共に、それを実現できる環境整備に努める。学校推薦型や総合選抜型など多様な入試形態にも対応できるよう、多面的な指導を行っていく。	学びの質の向上 高い「志」の育成と進路実現	①生徒の「志」を高めるため、各学年・教科・進路指導部による組織的・計画的なキャリア教育を実施する。 ②自主学習を習慣化し、効果的な時間管理意識を高めるため、定期的に学習状況調査を行う。 ③学習の定着力を高めるため、補習（前期・長期休業・後期）を開設し、積極的な参加を呼びかける。 ④大学受験に対応した学びを一層深めるため、スタディサプリを活用する。 ⑤保護者と協力して生徒の大学進学を支援するため、保護者に対して最新の進路情報を発信する。 ⑥生徒の進路選択、進路実現を図るため、担任による二者・三者面談を実施し、適切な助言を行う。	①ＬＨＲや総合的な探究の時間等を利用して、学年に応じた進路行事を実施できたか。 ②自主学習時間を縮小させずに維持できているか。 ③年間で 50 講座以上の進学講習を開講できたか。 ④スタディサプリを視聴できているか。また、朝学習・宿題配信などでの活用ができたか。 ⑤学校からの進路情報の提供が役立ったと感じる３年生保護者は８割以上である。 ⑥面談や面接指導が自身の進路選択に役立ったと感じる３年生は８割以上である。				
2	＜現状＞ ○「自主」「自律」の校訓のもと多くの生徒は落ち着いた高校生活を送っている。生徒自ら学校生活の中で主体的に判断し行動できるような活動を促進する。 ○自転車通学、交通機関利用通学ともに多くの生徒は安全に登下校をしている。 ○ICT 推進校として各教員がパフォーマンスを発揮しやすいように得意とするプラットフォームを活用してもらっている。一方で生徒やその他の教員から操作方法やエラーでの問い合わせが増えている。 ＜課題＞ ○自転車事故件数を減らすことと、自転車走行中のヘルメット着用率 100%を目標とする。 ○教育相談の件数が年々増加しているので、カウンセラーと相談しやすい環境作りと、早期に相談に来られるような情報発信と体制づくりを進めていく。	安心安全な高校生活	①登下校マナーアップ・駐輪マナーアップ・ヘルメット着用点検等を風紀委員会が行う。 ②教育相談委員会を各学期定期的に実施する。スクールカウンセラー、特別支援コーディネーター、スクールソーシャルワーカー、教職員、保護者間で情報交換を密にする。 ③携帯・インターネット安全教室を年度当初に実施し、年間を通じて生徒の意識向上を図る。	①風紀委員、教職員による各活動が１年間を通して行われたか。登下校等、マナーアップが図れたか。 ②教育相談委員会を各学期実施できたか。関係者間で情報を密にし、共有をすることができたか。 ③携帯・インターネット安全教室を実施し、十分な指導ができたか。				
		ICT の強みを生かした授業での生徒支援	①マニュアルや仕様書を充実させ、エラーが起こった際にメディア管理部が業者との窓口となり対応できるようにする。 ②図書館オリエンテーションにて生徒制作の動画等も見せ、図書館を身近に感じさせる。広報誌の作成、文学散歩などを実施する。	①仕様書やマニュアルを全教員が閲覧できる場所にまとめることができたか。エラー内容を集約するプラットフォームを作成できたか。 ②図書館利用者数が増加したか。「文学散歩」は予定通り実施できたか、参加希望者は増えたか。				
		学校行事の充実感	①生徒が主体的に考え、計画性をもって、生徒会活動全体の充実や改善向上を図ることができるようにする。 ②文化祭や体育祭などの学校行事において、近隣のあいさつ回りやホームページなどを十分に活用し、地域への公開を積極的に進める。	①生徒が主体的・自主的に活動・実践でき、達成感を得られたか。事後アンケート満足度９割以上。 ②地域の学校説明会等への参加。体育祭での挨拶回りの実施。文化祭来校者数 2,000人以上。				
3	＜現状＞ ○活動内容に応じた地域との交流を積極的に進めている。 ○志願倍率は普通科１．４１倍、理数科２．１２倍となった。入学者選抜において高倍率を維持すべく、募集業務の検証、改善をすすめている。 ○２年生が行う Online による共同研究やＳＳＨ海外サイエンス研修、それらのアウトリーチ活動を実行している。 ＜課題＞ ○地域の理数教育拠点校として、本校の取り組みを、アウトリーチ活動を通じて、市内の小中学校に伝えていく。 ○小中学生のサイエンスに対する興味関心を高めていくと同時に「さいたま STEAMS 教育」の核となる生徒の育成を図る取り組みを実践する。	開かれた学校づくり	①新入生アンケートを実施し、中学生の視点での魅力を確認する。 ②観点別評価における評価規準のたて方、保護者や生徒への周知の方法等について、校内で研究を進める。 ③外部から見た本校への評価・期待値を把握するため学校運営協議会等を実施し、指導・助言内容を踏まえ改善を図り、改善内容を保護者へ周知する。	①アンケート等が実施され、生徒募集行事改善に役立てられたか。 ②全ての教科・科目で指導と評価の一体化が実現できたか。 ③学校運営協議会等での意見などが本校の教育活動の改善につながっていると感じる保護者が５割以上である。				
		地域の理数教育拠点校	①「自由研究サポートプログラム」「ASEP JHS」「小学生サイエンス教室」を充実させ、参加者の満足度を上げていく。 ②地域の理数教育拠点校として市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開していく。	①サイエンスに対する興味関心を高めるためのイベントなどを企画実行することができたか。 ②「STEAMS Time」を計画通り実施し、市内の小中学校との連携を深め、情報の発信や新規事業を展開することができたか。				
4	＜現状＞ ○新学習指導要領実施４年目となり、観点別評価規準の立て方、ルーブリックの作成や評価方法などを改善してきたが、各教科でさらに研究し、教科間で共有していく必要がある。 ○海外との交流事業を多く実施しているが、その成果を検証し、学校全体としてより効果的な取組としていく必要がある。 ＜課題＞ ○国際交流委員会を中心に関係各所との業務連携を図る。 ○各分担で業務の内容、進め方について検証し、各業務複数体制の徹底を継続する。担当者の入れ替わりを考慮し、業務の引き継ぎを含め、さらなる効率化を図る。	教育環境の整備 国際交流の推進	①これまで実施してきている海外派遣事業、留学生受入事業を実施する際に複数分掌で対応し、潤滑な運営と内容の充実を図る。 ②海外との交流行事について、継続的な関係を築き学校全体での取組を推進する。また、交流経験のある海外の学校に対し、連絡の集約を実施し大宮北高校を中心とした国際交流事業の基盤を築く。	①交流事業において、参加した生徒が満足や達成感を感じ、成果をあげられる計画になっているか。 ②海外連携等を関係各所と連携し、組織的かつ協力的に進められたか。				
		学習環境の向上	①業務を複数で取り組むように努め、次年度に引き継げるよう、各業務の仕事内容を文字化し、反省点等をデータに残しておき、担当者で業務の進め方の工夫を図る。	①特に時間割編成、変更業務が効率化できたか。文書の適切な保存管理を行えたか。次年度への引き継ぎ体制ができたか。				
5	＜現状＞ ○ＳＳＨ２期４年目に入り、今年度より新たに加わる事業と、昨年行った事業の融合を図るとともに、３期申請に向けての具体的な方向性と計画を考え、実践していく必要がある。 ○科学的な視点に立って物事を考えられる取り組みの開発を行い、生徒に提供することで、より思考力を深化させていく必要がある。 ＜課題＞ ○海外の現地校とのお互いにとって充実したプログラムとなるよう、体験プログラムや事前研修の計画を立て継続的に実践する必要がある。 ○３年間の STEAMS Time、ＳＳＨサイエンスフィールドワークを重点に実行していく。	教職員の資質能力向上 探究的な学びの推進	①生徒の想像力、探究力および発表能力を育成するために本校独自の課題研究ガイドブックを作成し、具体的な活動計画を作成する。 ②多くの生徒が参加できるサイエンスフィールドワークを実施し、継続的な活動を行う環境をつくる。	①STEAMS TimeⅠは昨年度の総括を反映した内容になっているか、STEAMS TimeⅡは新しい状況に対応するための計画実施することができたか。 ②参加者アンケートの結果が好評であったか。				
		グローバルサイエンスリーダーの育成	①BEST CLaSS や GC4S を通して英語によるコミュニケーション能力の向上を図る。多くの生徒が Online による活動に取り組み、海外との共同研究を複数回設ける。 ②ハワイ、インドネシア、インドのサイエンス研修での共同研究とフィールドワークを、生徒が企画・実施できる活動計画を作成する。	①年間を通して複数の国や地域と Online による共同研究を実施することができたか。また、行われた行事に対して生徒が高い評価を行ったか。 ③ＳＳＨ海外サイエンス研修の内容の充実を図ることができたか。参加者アンケートの結果が好評であったか。				